

醍醐寺什寶品目

卷一 下

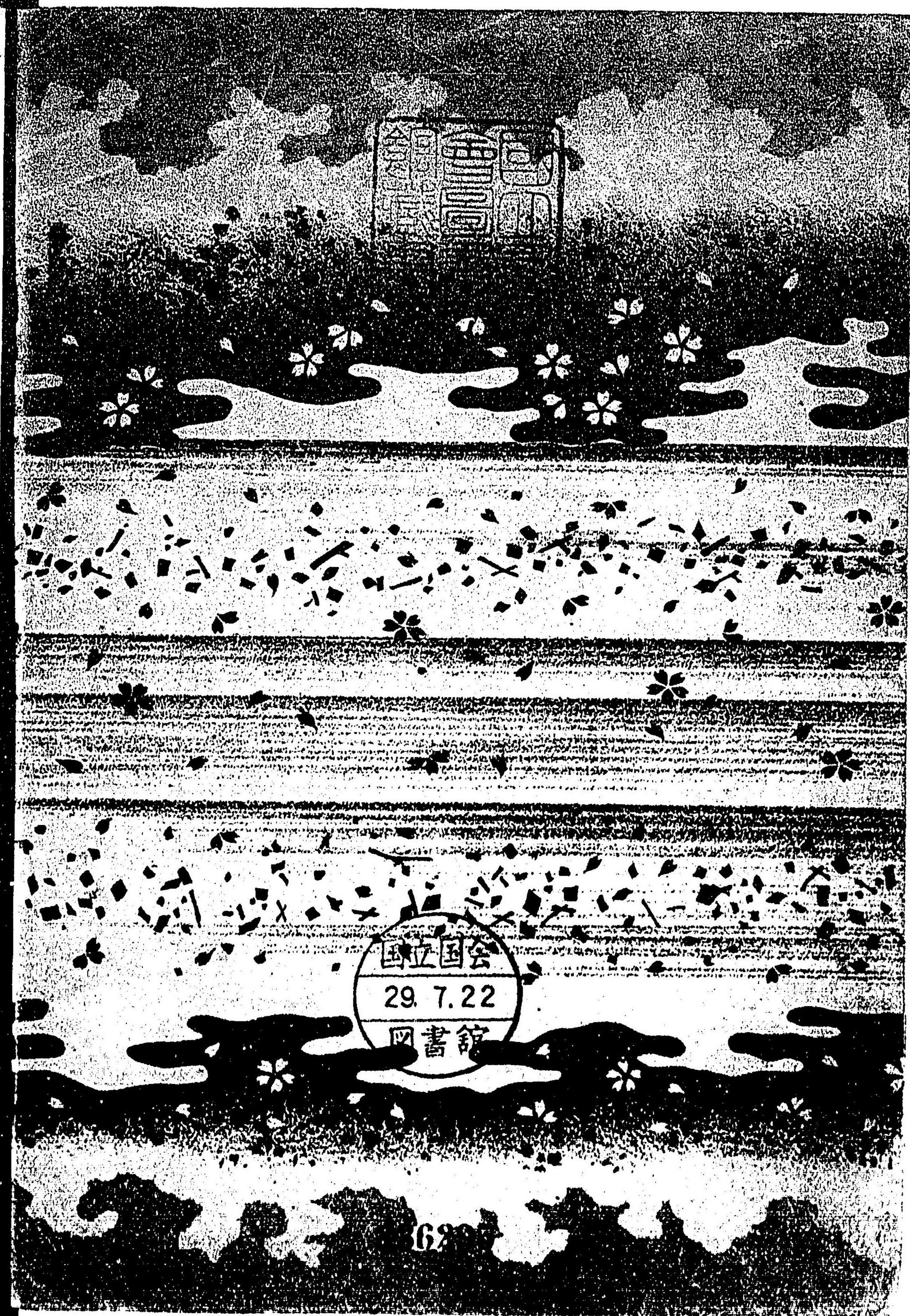
188.55
Ka187d
W

188.55
Ka187d

心 白



府 寶

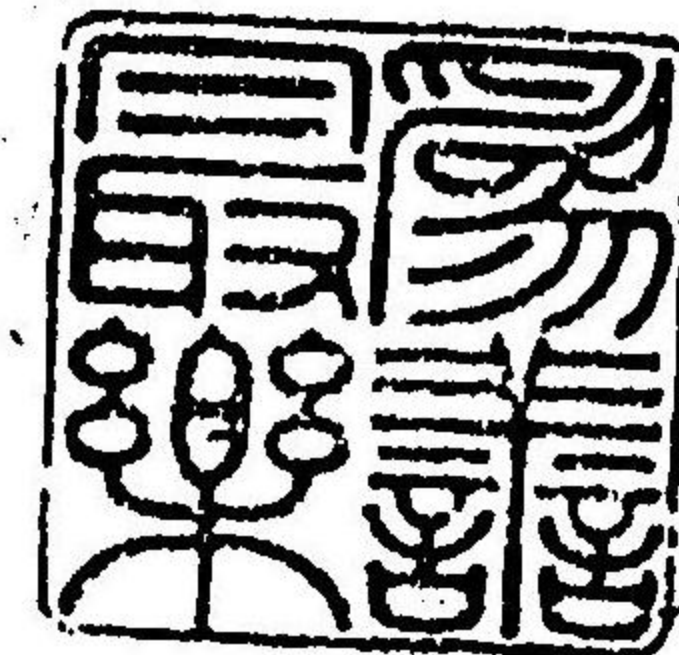
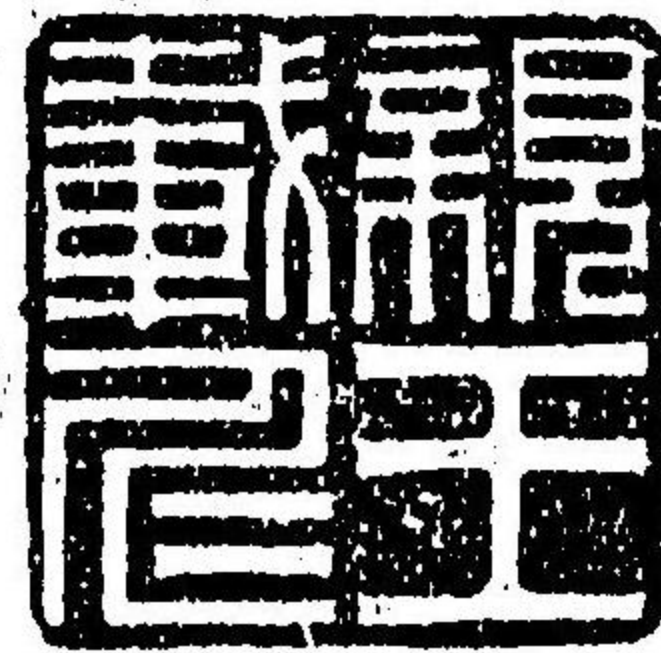


国立国会
29. 7. 22
図書館

620

明治丙申四月

載仁親王題



天平のむかし、いといちしるき寺院に令せて、縁起、流記、資財帳といふものを、注進せしめ給ふが故に、其創建出来おこを
はじめて、資財靈寶にいたるまで、よまかに記しつけて奉りしより、追すがひて、騰上行はれしを、
の定額寺の資財帳のおとを定めらるゝ、官符を載せれば、當時もその格文によりて、嚴重に注進せしめ給ふが故に、
では、この事ありしが如く、其おと處處に見ゆたり、さて後はいかありけむ、維新のおなたも、教部省の令に、
院の明細帳及び什器寶物、或は古文書等を、いとよまかに注進せしめられたる、今も猶その定の如くあるが故に、
國醍醐寺の一山は、西京の東南に位置して、歴史、宗教、はた建築、什寶などのうへにとりても、他に
ばかり、稀世の一大寶刹にして、本山の開基は、理源大師、即ち聖寶大僧正なり。かばかりの古刹も、
たぢらず、いちしるき建築什寶なども、時勢に伴はれて、維持する事、ほどく難からむとす、然るに、
り来て、國寶保存のことは、天下の輿論となりて、いとよまかしおこ、
皇室の御あたりにも、其意を用ひさせ給ひて、何くれに涉り、深く篤くなほざりならぬ樞要の事ども、おきて給へりどか承
りぬ、最もしかあるべき御事ならむかしと、いとよまかしおこし。されば上中下の有志の人々、おの醍醐寺の實況を觀たらむ
には、しか國寶保存の、わが國家に必用するべき事の感懐を、いとよまかしおこし、
理源大師は、弘法大師の法孫にして、
宇多醍醐の二帝ことに尊信したまひ、始て眞言事相部中に、小野流をひらき、又役行者の修驗宗を中興せられたれば、ふれ
を一流一宗の開祖とあふげり、醍醐の一山は、實に貞觀十八年の草創にして、今を距るおと凡一千餘年のむかしより、やが
て引ついでてみさかりに、

朱雀村上の二帝も、おほ深く篤く本山を信じ給ひ、また其後も、
白河帝、中宮の御ために、一寺を建させ給ひしは、おの御事されば、ますく其規模の宏大を極め、山上山下に跨りて、寺坊の
多かりし二百有餘に及べりき。況んや大師の出自を尋るに、王民にして、
光仁天皇第一皇子、正四位下春日親王の後、五世の恒蔭王の御事あり。生れて年十六、貞觀寺の眞雅僧正に隨ひ得度す、其
のち苦行歲月を送り、その宗教に種々の功勞を盡されし事、枚擧に遑わらず、寛平九年にいたりて、年六十六、少僧都に任し
昌泰四年にいたりて、年七十、大僧都に任し、延喜二年にいたりて、年七十一、權僧正に任し、同六年にいたりて、年七十五、
僧正に任せらる。また城都周遊の間に造る所の佛像若干を始て、寫す所の經論等そのくばしき事、又普明寺にて疾病を罹るや、
いとよまかしおこも、

宇多醍醐の二帝、親らその御床に臨ませ給ひし御事と、みな承平七年の記進に係る、根本僧正傳と題するものよ、いと詳
なり、就て見るべきにこそ。

三寶院は、十四代の座主勝覺僧正の創立にして、漸く理性院、報恩院、金剛王院無量壽院等の四寺をひらきしが、皆門跡に

列しければ、世に醍醐の五門跡と稱して崇敬す。然るに應仁の大亂に際して、一山大に衰へしも、第八十代の座主義演准后は、豊臣秀吉公に信を得られて、壯麗構造、ひとかたならぬ再興の功を遂ぐるにいたりしが、慶長年間、公は伏見に在城ありしからに、桃山より大道をひらき、つねに本山は道通せられて、その宮殿を營築し、林泉をも設置せられたり、これみか公の意匠に出つ、世に醍醐の花見とて、今は醍醐柄にするも、やがて此處をれば、そのしたゝかある事もおもふべし。現に大書院といふものは、かの藤原家の全盛のをり、もはらものして寢殿造りといひし所の式なれば、そのつゝきに泉殿あり、東を上の間とし、西のひと間を、能樂の舞臺にもあてらるゝが如くに、おれをしつらふ。すべて、當寺の建築は、たゞく中古意匠全盛時代の様式を、いま目の前に観るものにして、他所に此類決めてあらざる、構造の一典型なりや。しかのみにならず、本山所有の中古近代に渉る、宸翰、勅書の類はいふに及ばず、和漢書籍、歴史家乘の古寫本、古寫經、法教典、或は近代の諸記録など、實に枚擧に遑あらざるが中に就ても、足利幕府に出入せし、滿濟准后日記、文祿慶長ごろ、豊公に親密せりし、義演准后日記の類は、わが徒のつねに垂涎して、史の闕を補ふべき無類の寶録あり。其他の書籍記録など、いまだ文櫃のまゝにして檢閲を遂げざるものいと夥しく、佛像、法具、佛畫、教書の什寶に富むなど、これを見聞するに、實に法教に、歴史に、文學に、美術に、こよなき利益をあたふると、そもく幾許ぞや。さればその各種の什寶を縦覽せむとするには、まづ部類をわけたる標目こそ必要ならむと、かの天平の資財帳のむかしを憶ひ起して、ふたひ玉園快應氏おどりとて、みの品目を製するに、はしがき「ことごとくともどもめらるゝにまかせて、いさゝか記憶のかたはしにわはせて、眼に見しあたりの有さまをかくものしつ、もとより縁起由來などの如きは、別にくはしき具書あれば、それらを註見してありなむとぞ。

明治二十九年の四月ばかり

東京の小杉根邸しるす

この標紙の文様は、本寺の古歌集、續門葉集といふもの、御外題來みを、

後水尾院帝の御物好みにて調したる、その形のまゝをうつせるなり。さてその御外題は、

靈元院帝の宸筆あり、今は本寺に所藏す。又この品目の外題の形は、

後水尾院帝の、これも御物好みに出づる、御しをりをつせるなり。されば快應氏のみやびに出つ、因みにあはしむるしとよ。

醍醐寺什寶品目第壹輯之上

總目

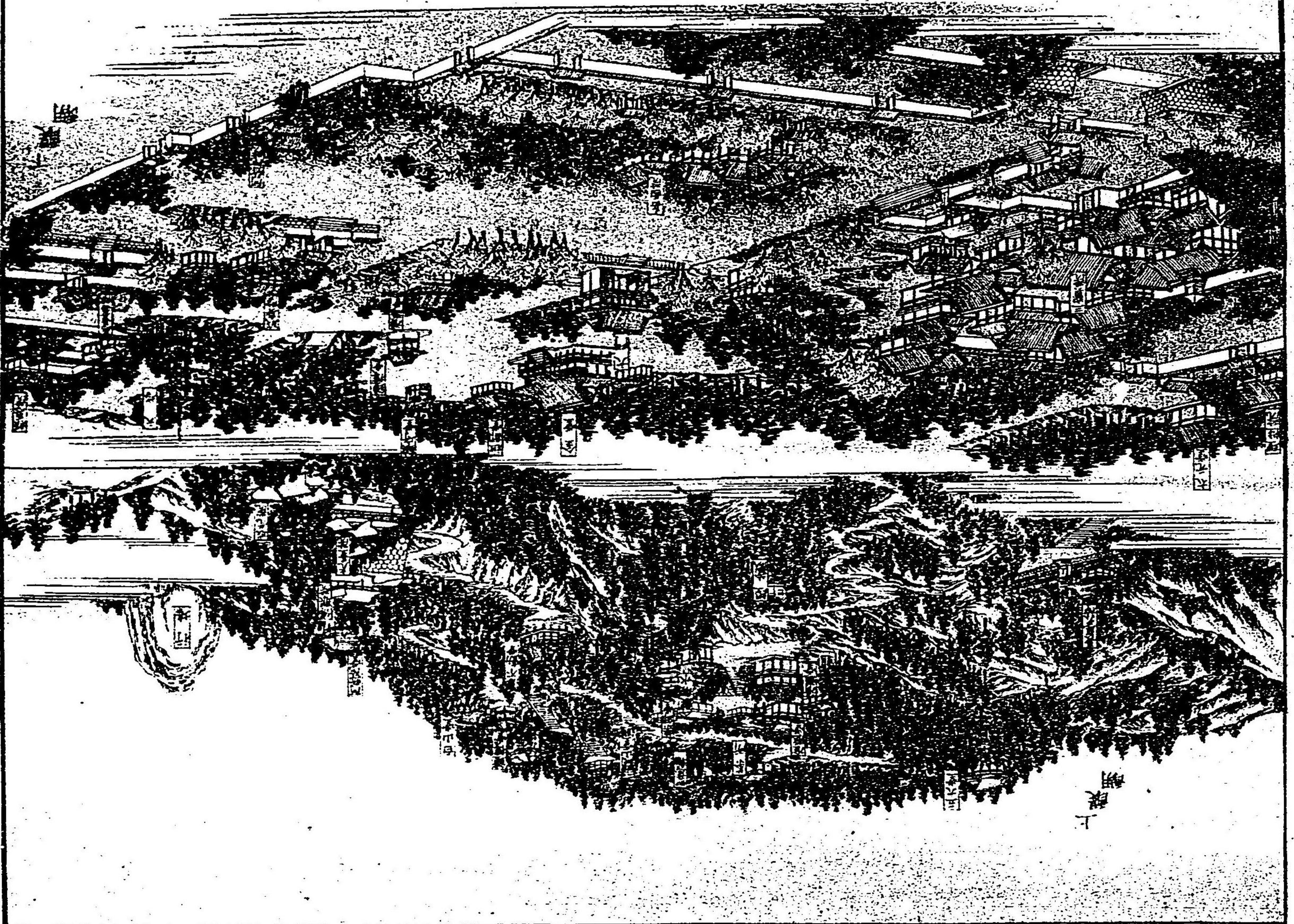
佛像	木像	二百七十種
	銀像	壹種
	銅像	四十種
	塑像	二種
	石像	十二種
佛畫	曼荼羅	七十五種
	佛菩薩	八十一種
	明王	六十一種
	天部	九種
	肖像	百卅三種
	佛像粉本	八十種
佛具		五十五種
經卷	古寫	壹百五種
	古板	十七種
聖經		七種

醍醐寺什寶品目第壹輯之下

總目

書畫	懸幅	廿六種
	卷帖	四十一卷
	冊子	四十一冊
	屏風	廿二種
	扁額	五面
	陶磁器	八種
	冶鑄器	十四種
	彫刻	四種
	刀劍	七種
	香曲器	七種
	樂器	廿二種
	衣裳	九種
	剪綵繪	壹種
	茗器	卅一種
	輿	五種
	藥品	五種

圖琴丹境院寶三山廟聖國城山



醍醐天皇尊影



醍醐天皇

探儀縮寫

五重塔



其二

唐門



仁王門

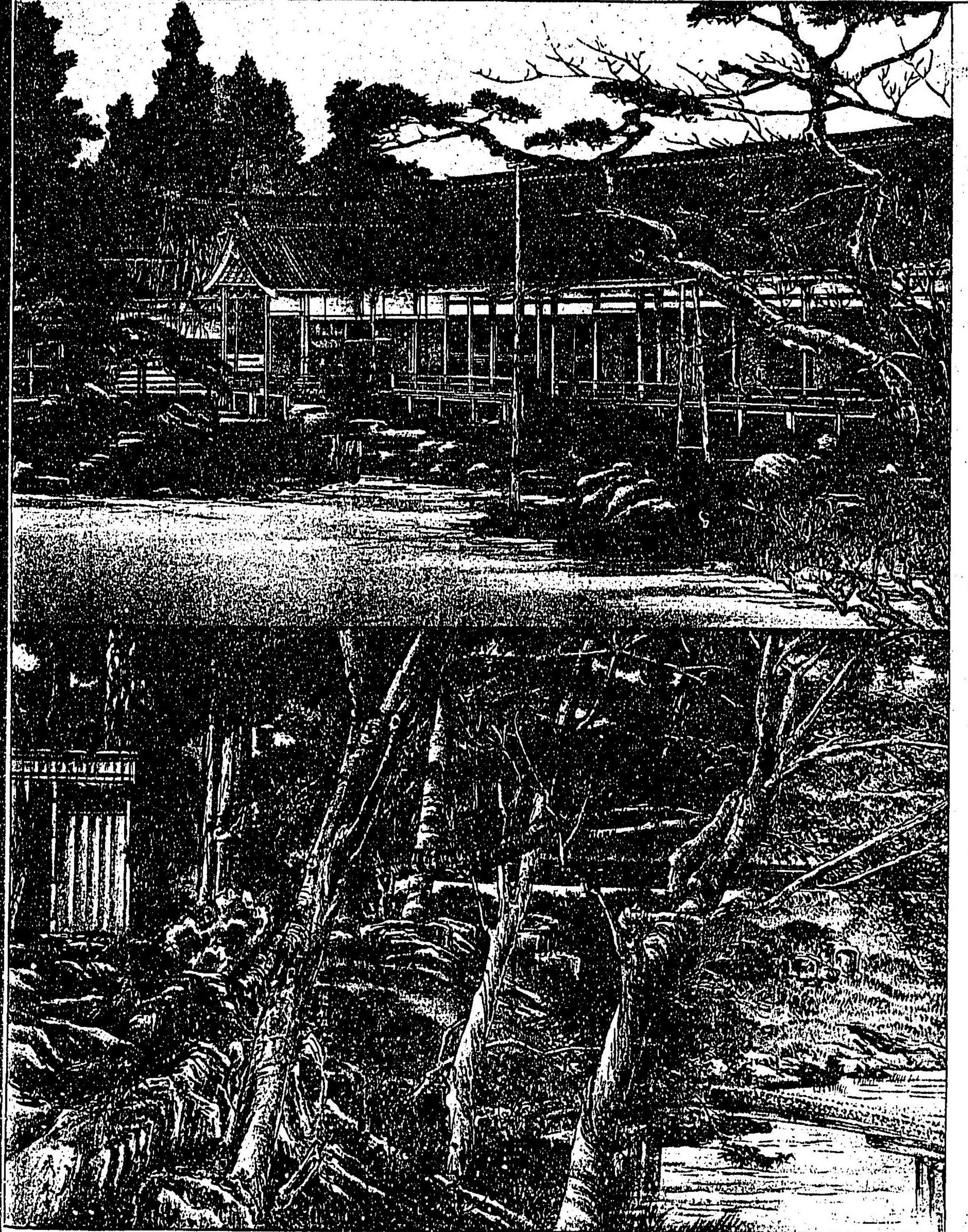


三寶院庭院其一

全副大日如来木像



震殿



其三

五秘密畫像



降三世明王畫像



智泉大德筆

五幅之內

秀禾書

師親法界含靈悉脫苦趣同生安樂開法悟道
次及己身離諸災難此報盡時生々世々同世
一處不難三寶助揚佛事供養衆具皆悉滿足
廣度有情同歸覺岸者耳 庚戌四月日敬書

施主比丘 慈淑
同願比丘 日精

以此誦經功德普皆回向四恩三有法界衆無
生上善提真如實際願其法界諸衆生等臨命
終時七日以前預知時至心不顛倒心不失念
心不散亂無諸痛苦身心安樂如入禪定遇善
知識教稱十念聖衆現前承佛願力上品往生
阿彌陀佛極樂國土到彼土已離六神通遊歷
十方奉侍諸佛常聞無上微妙正法修行普賢
無量行願願願悉得圓滿速證菩提法界
究親同斯願海摩訶般若波羅蜜

大般涅槃經第十六 筆者不詳

金剛心經 光明皇后若筆 紙背押東大寺印 筆者不詳卷尾 有善光之印 魚養筆

無垢淨光大陀羅尼 一卷

般若心經 一卷

金剛場陀羅尼經 一卷

包紙 大師御筆 應安五年八月五日自
大閣二條殿所下給之也自一條殿御寶藏
被召之云云

大方廣佛花嚴經入法界品第卅九之十八 一卷

包紙 高祖大師御筆 花嚴經 一局自小倉
宮賜之

七月八日 花 押

注法華經卷第四 弘法大師筆 一卷

大日經開題草稿 弘法大師筆 一卷

紺紙金泥摩訶心經 弘法大師筆卷首有 一字三體之文字 一卷

菩薩戒本 紺紙金泥 壹卷

包紙 去年庚申秋九月中旬予依瑜伽通
受羯磨受戒等戒今茲辛酉始夏安居會
有人持金字經一卷來付予曰此是明慧上
人之所寫請永珍藏予敬閱之乃瑜伽戒本
也伏以天意遙加欲使予自堅持戒及普利
他乎不勝感喜記傳于三寶院至其慧公所
寫未詳真寫具後生當繼

李和元年九月十六日 座主前大僧正高演識

金剛界禮懺 成賢阿闍梨筆 壹卷

般若理趣經 同筆 壹卷

禮懺者不知筆也 花 押

金剛界禮懺 同筆 壹卷

胎藏界禮懺 同筆 壹卷

尊勝陀羅尼并般若心經發願 同筆 壹卷

悉曇字母 同筆 壹卷

字 母 等 同筆 壹卷

臨終行儀 同筆 壹卷

奧書 傳開橋大夫盛助無惡不造者也云
云讀此願文遂往生云云仍所書持也

東寺沙門成賢

大佛頂陀羅尼 壹卷

奧書 承元二年四月廿七日依同法誦於
白川善勝寺唯筆了 沙門成賢

悉曇字母 成賢備正書 二部

奧書 悉深僧正御筆行樹院累代物也 壹卷

草字心經 弘法大師筆 一卷

草字心經 弘法大師筆 二部一卷

慈悲道場懺法 弘法大師筆 九十二卷

稱讚大乘功德經 弘法大師筆 一卷

法華經 弘法大師筆 一部

佛頂尊勝陀羅尼 弘法大師筆 一部

包紙 尊師聖寶僧正御筆跡也 員數廿三枚入也

如意輪陀羅尼 理源大師筆 一卷

淨名經 理源大師筆 一卷

理源大師真跡 三行廿四字

裏書 此尊師真跡者某甲大德從予符法
傳受之後爲布施被贈之最無比之重寶也
滅後遺弟能傳持以堅不可出相外者也
舊持主有由隱名字故任其意不註之
右文化元年六月中旬受納今茲文化八
年次辛未臘月廿日修補成焉廿五日已
己記之

醍醐寺普賢院主僧正澄意花押

金剛壽命經 觀賢僧正筆 一卷

金剛壽命經 觀賢僧正筆 一卷

理趣經 觀賢僧正筆 一卷

隨佛念誦要訣 一卷

奧書 承平三年四月廿七日求得手書
求法僧抄祐

菩提場莊嚴陀羅尼外陀羅尼三種 壹卷

奧書 應德三年八月十日書寫了
醍醐寺勝覺

悉曇字母 勝覺筆 壹卷

寶珠密印 勝賢筆 壹卷

具支灌頂儀式 壹卷

包紙延命院元果真跡也遮那院法流之什
物三種之內斯其隨一

奧書 或本云此法中天竺人修習未足一
七日忽得王位最秘法勿忘與人云云

書本云 寬喜二年歲次十月上旬之比書
寫了空幻 以北白川持本交了 同三年
五月七日又一交了空幻 同三年九月十
五日於三輪平等寺最以秘藏證本移點了

文曆二年八月廿五日於加茂別當社頭書
寫了 右筆 良慶

書慶長十八年月日 求得之暫時不可出
闔之外矣 傳領義演

金剛壽命陀羅尼經 壹卷

奧書 正安三年八月四日依懸望賜如意
壽慶畢日々轉讀不懈者延春無疑歟

大日經疏 深賢筆 二十卷

奧書 第一以先師岳東院僧正御持本書
寫了 一交了 入室資深賢

第二建保五年四月二十四日點了
一交了 深賢

第三建保四年八月七日書寫了
朱同五年初夏比移點了砂門深賢

但具緣品已下誦同法等令點之
也矣

書本者故常喜院阿闍梨持本云云
先師岳東院僧正御房傳領之未卷有
日修本一筆書寫移點了

第四建保四年八月一日書寫了
朱同五年四月移點了
求法未技深賢

納錦袋 嘉吉三三三 金剛佛子口濟記之 壹卷

大法華經 紺紙金泥 壹卷

法華經藥王品 紺紙金泥 壹卷

奧書 行成眞筆三枚自治部阿闍梨御坊
相傳之

建武貳年五月十九日 奉千世磨

最勝王經除病品 壹卷

包紙 道風筆最勝王經除病品一紙十
六行從 禁裏仰之間令進上了消逸院與
書有之追而可加奧書也

文祿二年四月三日 義演書之

包紙 此一卷自洪恩院殿御遺物而傳給
也尤可秘藏候也

最勝王經除病品道風筆跡也

入眞言門 一卷

奧書 佛種從緣與從緣滅正法依時榮依
仁弘品密教繁昌依秘有悉地成否縱雖上
足智行極不可授非器此雜秘文努々々可
秘々々若及他見者東寺佛法忽衰微者歟
二十萬頭最頂千部論骨勢即身成佛要樞
也矣

三十七尊出生義 實運筆 一卷

押紙云 實運之御諱有此所修補之時經
師除去了卒再三沙汰不可說云云後資爲
存知記之 有 雅

御請來錄 一卷

包紙 此一局道教筆高野邊八必令傳受
云云

佛名會表白 行升筆 一卷

舍利講式 月輪兼實公筆 一卷

第六建保四年七月十八日醍醐於三寶院
比房書寫了 求法沙門深賢

朱同五年四月點了同六月十一日一
交了

第七 一交了

建保四年七月廿一日書寫了
朱同五年四月下旬 少僧正移點之

追而

第九建保四年八月拾九日於醍醐三寶院
北房書寫了 求法未技深賢坊

第十建保四年暮秋朔朝於醍醐寺草菴書
寫了 求法沙門深賢

朱同五年仲夏八日移點了
一交了

第十一建保四年九月廿一日長冠書寫了
朱同五年五月十八日 沙門深賢朱點了

一交了

第十二建保四年初冬仲旬第八之夕於北
房學窓書了 求法未鹿深賢

一交了

第十三書寫交點一筆 深賢

第十四 朱建保五年五月十九日朱點了

第十五 本館云已上十五卷金剛寺於招兩
三學徒以數本讀合了寫然而於未
決所不可
建保四年臘月十四日於北房書寫
了于時雖北窓中聚雪之勤聊有硯
上叩水之志矣 求法未資深賢

第十六本云長寬二季始自十月一日迄于同潤十月十六日已上具緣品已下十四品於金剛峯寺西谷佛種房菴室奉受之了其次以證 本兩三讀合了聽衆一兩西法房上人等也殘四局依風氣被坐不訖之耳

朱建保五年五月廿四日朱點了
第十七建保五年仲夏下旬移點了
第十八建保五年正月廿二日於醍醐寺三寶院北房書寫了 沙門深賢
第十九建保五年二月六日書寫了
同年五月十九日 沙門深賢
第二十建保五年丁四月十二日書寫了抑一部書寫者多年蓄懷也雖然或始而不遂之或懷徒送年然去年之曆初秋之天適澄本方始首題遂以兩年十箇月之間既果一筆廿卷之功了

金剛佛子權律師深賢生三十九年
同年六月三十一交移點了
外題師主僧正院御手跡也
寫本者心覺阿闍梨持本云々
奉讓先師岳東院僧正御房本證也
法花義疏 吉藏師撰 十二卷之內 四卷
奧書 第三建仁三年十月二十七日移點
此義疏一部不交他筆移點畢是偏爲與隆佛法也此本唐禪院本也不慮住京之間於高倉坊生之宿所功畢更不可置他所必可安置上醍醐也背此狀橫成妨押領之人本山清瀧大明神可尉彼人也 乘 運
奧書 第五第六無之

同第十二建久元年四月廿一日下拜殿卅講畢十二年之間不關勤也 乘 運
元曆元年六月廿七日爲真阿羅人往生極樂也
朱同七月一日點了 一交了 乘運之本願以書寫善 生々開慧眼
世々得聰持 自他成佛道
般 若 心 經 足利尊氏筆 一卷
理 趣 經 若宮八幡納經之內 一卷
奧書 三寶院大僧正賢俊相當四十九日佛事般若理趣經一卷自書寫者也
延文二年八月廿八日
正二位源朝臣尊氏花押
遍照金剛遺告書
奧書 法務大僧正弘真相傳本
延元三年四月十四日所經 高覽以宸筆所被下相傳本也秘藏々々法務大僧正弘真奉持本也
包紙 正長元年七月八日出拂了
准 三 宮 押
高祖大師真筆御遺告一局弘真僧正令隨身離寺以來既送數十年歲月畢爰彼僧正遺跡當寺居住越前國云々仍申入 公方之間不日被召出被返入本寺經藏者也併鎮守權現神慮高祖大師冥助者哉未來相傳仁如守眼精不可出當寺若背此旨定鎮守三寶可加治罰給者歟尤可恐々々
奧書弘真僧正自筆亦相傳之由後醍醐院被筆染宸筆
應永廿九年八月廿一日 座 主 押
包紙 永正十四年五月十四日御出拂之次於御前奉開之 大僧都源雅
大黑天講式 應永廿八年 智康 押

佛說孟蘭盆經 一卷
奧書 應永廿三年丙申七月十一日於釋迦院閉窓願寫即移點訖
西溪老侶七旬有六
大雲輪請雨經 壹部
奧書 應永二年乙亥天七月下旬比以內山本一校即未□□彼本上下二局也此本一帖一卷之樣也全文改同調□是大異歟但如御請來六者大雲輪請雨經一局云云猶可尋也矣

佛說孟蘭盆經 一卷
奧書 應永廿三年丙申七月十一日於釋迦院閉窓願寫即移點訖
西溪老侶七旬有六
大雲輪請雨經 壹部
奧書 應永二年乙亥天七月下旬比以內山本一校即未□□彼本上下二局也此本一帖一卷之樣也全文改同調□是大異歟但如御請來六者大雲輪請雨經一局云云猶可尋也矣

大雲輪請雨經 壹部
奧書 本云集數本書寫校點畢 東寺沙門成 本自建保三年六月六日於神泉院請雨經法勤行之及第七日甘雨普潤即日結願了
貞應三年六月十日於醍醐寺西南院書寫校點了但書寫者以他筆挑了金剛佛子法眼道教本 廿五年 正嘉元年七月十七日於上醍醐覺洞院奉傳受了金剛佛子
文永三年六月廿七日於醍醐寺地藏院奉傳受了金剛佛子親玄
賜此結本應長元年十二月十一日昏鐘之時燈下走筆終功者 紙數三十三枚有之

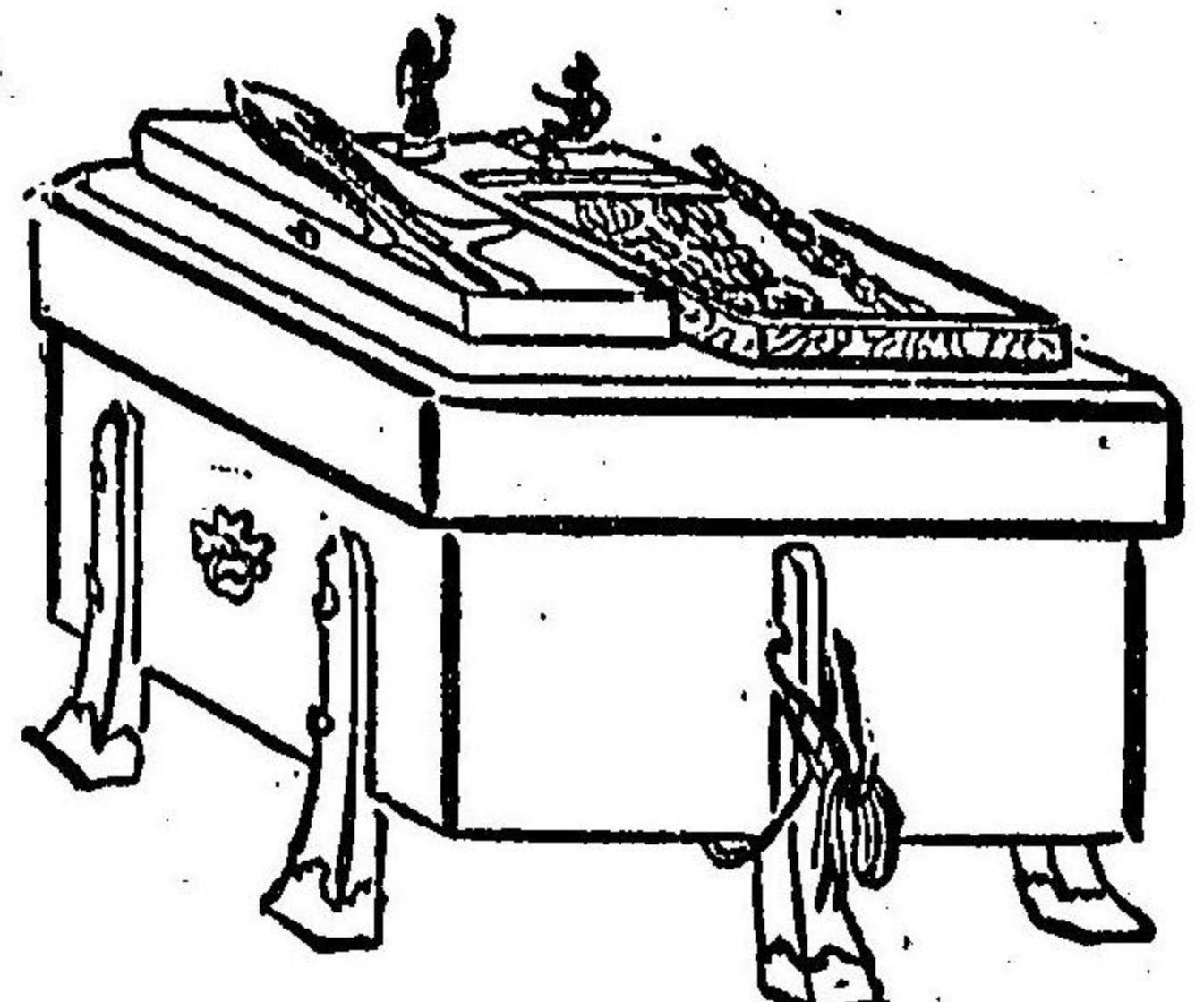
理 趣 經 筆者不詳 一卷
孔 雀 經 筆者不詳 一部
大毘盧舍那成佛經第三 一卷
奧書(朱)同年同月廿九日已點了 一交了
悉 曇 字 母 諸師傳云云所謂人々梵字舍利供養略式 筆者不詳 壹卷
八名普密陀羅尼 紺紙泥 壹卷
全 奧書 當院坊主海法印筆跡也 令秘藏
慶安二年七月朔日以或本令點了
前大僧正寬濟
般 若 心 經 近衛家源筆 一部
蘇悉地羯羅經請問品 筆者不詳 一卷
般 若 心 經 紺紙金泥 石川備中守筆 一卷
奧書 享保三年龍集戌戌冬十一月十四日於伏陽官舍奉書寫之
從五位下備中守源朝臣總乘

正長貳年五月廿一日於醍醐寺妙法院北部屋以深譽法印之本博士等校合畢
沙門弘慶
祈 願 集
奧書 去應仁之亂仁和寺御經藏ヨリ出御聖教ノ隨一法印寶承一校了
阿彌陀講式
奧書 文安五年二月三日書寫之
雖爲惡筆內々爲稽古不願后見恥辱片時ノ開書寫之定テ可有落字者乎右筆□花押
一切如來心秘密全身舍利寶篋印陀羅尼經
奧書 慶長第十三之曆林鐘上旬馳禿
壹畢 座主准三宮 押 五十一
金剛頂經瑜伽十八會指歸 壹卷
奧書 慶長十三曆仲夏二月六日書寫了
深納箱底莫令他散□花 押

秘密漫荼羅十住心論 壹部
奧書 全部拾冊冊抽書寫了輒不出箱之底是紛失之基也依聖教法命相續無章疏佛實何住未資莫輕可愼云云于時元祿三稔 寶中句記之矣 金剛 佛子 押
眞 言 集 壹部
奧書 右真言集上中下三卷明曆元年未乙卯月八日師天阿上人御本書合書寫校合了
通照院心阿
出家授戒作法
奧書 于時天正第七之曆十月上旬候於金剛輪院以報恩院 深僧正御自筆今摸寫了但神分已下者以隆源僧正筆同書加

般 若 心 經 紺紙金泥法傍前大 一卷
佛說阿彌陀經 壹卷
奧書 明德二年六月廿三日依密藏院法

仁 王 經 筆者不詳 二部
五 社 講 式 高賢僧正筆 一部
大 孔 雀 明 王 經 壹卷
不 空 索 神 咒 心 經 壹卷
奧書 保 年六月廿八日移轉畢
法華經普門品 紺紙金泥 壹卷
減金經宮表書 且那妙周宗見
奉納金字普門品經西國卅三所內
願主明南
金剛界禮懺 筆者不明 一卷



宋 版 大 藏 經 (後樂坊奉納) 全部
同 大 般 若 經 三 百 七 十 八 (印和年間) 一卷
同 華 嚴 經 二 十 七 (成淨年間) 一卷
同 菩 薩 戒 羯 磨 文 (卷首有唐印) 一卷
同 文 珠 指 南 圖 讚 (卷首有唐印) 一卷
大 方 廣 佛 花 嚴 經 八十一卷
奧書 第一卷刻經緣起
華嚴之刻也庚午秋同友人張 公過長壽菴謂及華嚴法實之難於嶺土將歲刻一卷流通十方可乎不慧曰是經卷數頗多恐歲月之久而能告成不慧遂承刻全部以答三寶及雙誓之恩惟諸公助製費足矣連以緣阻資西購梨材冬初起工甲戌冬過歲而工已竣自始事及率工皆不慧拮据厥事凡

見聞受持如是經者當生難遭想發無上心
如經所說悉皆持行庶可答 諸佛之弘恩
然亦不虛弘後之初願耳
崇禎七年歲在甲戌孟冬雲集主人弘俊黃
公俊識
奧書第二
皇明崇禎七年歲在甲戌孟冬南海郡佛子
弘俊捐捨淨貨奉刻
大方廣佛華嚴經全部流通十方上祝
皇圖永固 帝道遐昌 佛日增輝
法輪常轉 在堂嚴慈福社遐茂
祿壽延綿發大乘正信荷佛智慧入金剛心
成無上道更祈弘後業障冰消惡緣空寂戒
德莊嚴辯才無礙願破无明入月覺海報盡
蓮邦上生蒙佛授記世生生行菩薩道行
願等於普賢慈同於觀世再願與四恩三
有同登華藏支門八難三塗同入毘盧性海
者
奧書第八十一有復庵和尚華嚴繪贊依長
文省之
古版仁王經(世云醒醒版) 二卷
奧書建武五年六月九日修覆之訖前大僧
正賢助持經之
應永廿五 七月晦日奉修覆之訖祖師普
提寺前大僧正坊與書也 傳 領 滿 濟
同仁王經 二卷
奧書 右醒醒寺櫻會之時摺寫印版紛失
之間今依群議以上古本重彫刻訖願此功
德普及一切天下泰平五教成就文武百寮
各願圓滿佛法興隆伽藍繁昌諸人快樂與
善結緣二世大願決定成就乃至法界平等
利益矣
明應八年己未三月六日上醒醒寺

大日經疏 廿卷
奧書 第一
建治三年丁丑五月四日於金剛峯寺信藝書
為續三寶慧命於三會之出世廣施一善利
益於一切之衆生是則守大師之遺誠偷令
遂小臣之心願謹以開印板矣
建治三年丁丑八月 日
從五位上行秋田城介藤原朝臣
同奧書 第二
建治三年丁丑六月三日於金剛峯寺信藝書
為續三寶慧命於三會之出世廣施一善利
益於一切之衆生是則守大師之遺誠偷令
遂小臣之心願謹以開印板矣
建治三年丁丑九月 日
從五位上行秋田城介藤原朝臣
奧書 第三
建治三年丁丑六月廿三日於金剛峯寺信藝
書
奧書 第四
建治三年丁丑七月六日於金剛峯寺信藝書
奧書 第五
建治三年丁丑七月廿五日於金剛峯寺信藝
書
奧書 第六
建治三年丁丑十月廿三日於金剛峯寺信藝
書
奧書 第七
建治三年丁丑十一月三日於金剛峯寺信藝
書
奧書 第八
建治三年丁丑十一月十九日於金剛峯寺信
藝書
奧書 第九
弘安三年三月廿一日於金剛峯寺信藝書

奧書 第十
建治四年戊寅正月八日於金剛峯寺信藝書
奧書 第十一
建治四年戊寅二月四日於金剛峯寺信藝書
奧書 第十二
弘安元年戊辰四月二日於金剛峯寺信藝書
奧書 第十三
弘安元年戊辰八月廿二日於金剛峯寺信藝
書
奧書 第十四
弘安元年戊辰十月四日於金剛峯寺信藝書
奧書 第十五
弘安元年戊辰十一月四日於金剛峯寺信藝
書
奧書 第十六
弘安元年戊辰十一月十六日於金剛峯寺信
藝書
奧書 第十七
弘安元年十一月晦日於金剛峯寺信藝書
奧書 第十八
弘安二年正月三日於金剛峯寺信藝書
奧書 第十九
弘安二年四月四日於金剛峯寺信藝書
奧書 第二十
為續三寶慧命於三會之出世廣施一善利
益於一切之衆生是則守大師遺誠偷令遂
小臣之心願謹以開印板矣
弘安二年己卯四月 日
從五位上行秋田城介藤原朝臣泰盛
大經疏一部少卷招學侶十許輩廣考覈
其文字於是願主尊閣啓 仁和寺二品
大王賜證本兩帙兼得當山中院明算阿闍
梨書本今彼兩本以為准的若猶致有疑則
間披諸本審決差當第九疏翻梵文博吃又

義按字諸本有異魚魯難辨第十二疏引線
定方位 字可用辨敷加之魚註相濫廻文
紛綸並用證本不得自由又至文字作者以
切韻及玉篇所勸載也但 則獨載和審猶
指當疏亦復准多本此例稍非深謹慎之
思不顯加顯之功者也
弘安元年十一月十一日金剛佛子良和
記之
弘安二年四月廿三日於金剛峯寺信藝
書
阿彌陀經 一卷
奧書 正中二年正月一日於山陵坊博士
畢賢照之應永十六年林鐘之頃自或方相
傳之泉常之
五部大經 十六冊
奧書 右經五七軸印版釋師主權僧正十
三回之忌命鑲梓而置此於東寺西院冀以
此無盡莊嚴之法文資彼三覺圓滿之菩提
亦望續密藏於三會救群生於彼岸矣
嘉吉元年辛酉六月十五日
權律師覺增謹識
理 趣 經 一卷
奧書 右此一卷者 高祖大師八百五
十年忌舞樂曼荼羅供之分經也
佛垂般涅槃畧說教誡經 一卷
奧書 貞享四年龍飛丁卯臘月吉日經生
種玉軒甲谷善六壽梓印
金剛頂經 三卷
奧書 今月朔日利政依有懇篤之信心忽
授兩部之印可畢
後日此三卷并大日經全部奉上之暫時勿
渡于他所秘藏云
于時慶長十七年壬子六月十二日
法務 花 押
釋摩訶衍論 八冊
奧書 慶長十四稔 酉 月 日全部

十帖感得也屬老眼點校之暫時莫移于他
所是併散失之基也可慎々々矣
座主准三后花押
叫 字 義 一冊
奧書 為奉報高祖鴻恩蒙貴賤助成謹以
開印板矣
元和二丙辰曆二月二十一日
願主東寺順宗
孟 蘭 盆 經 一卷
細字法華經 一卷
三寶院流聖教 全部
理性院流聖教 全部
無量壽院流聖教 全部
金剛王院流聖教 全部
地藏院流聖教 全部
中院流聖教 全部
安祥寺流聖教 全部
醍醐寺什寶品目第壹 之下
○懸 畫 幅
後水尾帝宸筆
後奈良院宸筆
後水尾帝宸筆
靈光院法皇宸筆
仙洞良仁宸筆
中務卿總仁親王
近衛顯山公
藤原信房
同 輔平
准三宮滿濟
同 義演
內大臣信義

細川幽齋
片桐且元
織田信長
于五筆
絹本墨畫
天台王之一筆
同
林良筆
絹本墨畫 野常信筆
絹本墨畫 陳琳筆
女院房于筆
絹本墨畫 居龍筆
明宮筆
曹風成起等合作
○卷 帖
後宇多院宸筆御聖文 靈淨苑三通 壹卷
古筆大手鑑 壹帖
全 小 手 鑑 壹帖
尊 師 傳 壹卷
東南院主房起請 理深大師筆
奧書 右開山根本尊師御真筆今度不虛
太閤秀吉公 執事石田治部少輔所望依難
默止右六行切遣之仍寫留畢
文祿五年正月廿一日准三宮法務
老僧冤罪云々 理深大師筆 壹卷
奉 理 毛 筆 文 弘法大師筆 壹卷
佛 隆 寺 鐘 銘 成賢僧正筆 壹卷
最 澄 尺 牘 集 釋月筆 正應二年 壹卷
滿 濟 准 后 戒 牒 齊藤院尊道筆 壹卷
覺 定 增 正 戒 牒 齊藤院尊道筆 壹卷
義 賢 僧 正 戒 牒 妙法院義仁筆 壹卷
佐 山 宮 文 書 壹卷
堯 空 上 人 之 書 壹卷
本朝文粹卷第六 卷首欠 壹卷
奧書 延慶元年十一月十八日依少人之
芳命染禿筆了 執事沙門禪兼長春丸之

遊仙窟

與書 右此書者江中納言維時卿康和聖主為學士之際再三之蒙 宣之處未聞今見之剩仰天之境節或仁云木古島神主所傳也仍維時卿乘毛車罷之處彼神主着布衣目文車也唯書取出之云云君者文王之太祖我朝之文士也然而所存如此仍被授畢其後所召御侍讀也

本云 正安二年二月十一日書寫之 同廿八日交點了 康永三年十月十六日摸之訖 法印權大僧都宗算花押 論語卷第七 卷首欠 壹卷

同七年後五月二日重見合了移勘物等 文永七年十二月十三日以累家之說奉授 三品羽林芳閣畢 主殿權助中原師秀 文永七年十二月廿八日以累家之說奉授 三品羽林芳閣畢 主殿權助中原師秀 文 第三 第四 二帖

與書 永正元甲子孟夏十日御領之金剛 戲 應永廿三年八月三日 壹卷 男色 繪 詞 鳥羽僧正筆 全 米元章 真跡 壹帖 花見之和歌 壹帖 倭名 品 壹卷 續門 葉集 拾卷

筆者 第一憲淳僧正 第二筆者不知 第三筆者不知 第四中性院僧都 第五同筆 第六憲淳僧都 第七右王曆 第八隆舜僧正 第九同筆 第十拾圓俊法印

攀南山禪關久送數廻之曆適終一返之功 矣 未資 隆澄 寶治元年十一月四日御本校合移點畢合 朱墨注之件本依 北院御室仰文章博士 敦周點進之又校合或本為其師點畢 一部十帖故隆澄僧正持本也先年法付屬 于予了可秘可秘 法助記之 三 寶 繪 壹冊 與書云 源為憲撰 寬喜二年寫叙賢裏 具注曆 自一至五 何晏集解 壹冊 論 語 全 明應二年癸巳孟秋廿八日目下足利 出來本寫之 日本紀 神代上 卷首欠 古寫本 全 探要法花驗記上下 二冊 與書卷上 嘉儀三年七月廿二日於醍醐 寺地藏院申刻書寫之畢為一乘結緣終數 日微功也欣求菩提沙門深賢記之 朱香同 八月十四日點了土用 〇 與書卷下 嘉儀二年春潤二月廿二日宰 相公終書功了于時櫻花盛開見之與之輩 滿寺門云云 不論貴賤與親疎之謂可實哉 抑予仰信法花之結緣之至今書之也書寫 此經二部轉讀又及百餘部一句一偈之緣 猶以莫踐雖淺豈其空哉 金剛齋 花押 壹冊 弘法大師御年譜 卷首欠 壹冊 弘法大師御傳 卷首欠 壹冊 弘法大師御傳 深賢筆 三冊 與書卷上 太上皇有勅請下大師安置中

五十三驛畫 序源光國畫不詳 壹帖 省研亭十二景詩 壹卷 峯中秘圖 壹卷 廿四孝之圖 九條學家公 六首和歌 壹卷 竹 梵字名號 壹卷 酒香童子退治之圖 石禮 全 麻姑山圖 全 上林賦圖 全 百老之圖 壹卷 五十賀詩歌並圖 壹卷 六十賀之和歌 壹卷 古稀年賀之詩歌 壹卷 嘉玉來之詩歌 壹卷 蓮枝會之詩全並圖 壹卷 尙齒會之圖並記 壹卷

粉川大率都婆建立緣起 壹冊 大安寺緣起 壹冊 東大寺盧遮那大佛願文 壹冊 清水寺建立記 壹冊 高野寺緣起 壹冊 子島山寺建立緣起 壹冊 招提寺建立緣起 壹冊 六角堂緣起 壹冊 藥師寺緣起 壹冊 放光菩薩記 壹冊 龍門寺 壹冊 彌勒本朝大師 壹冊 關寺緣起 壹冊 大神宮法講會緣起 壹冊

務省供養月餘還久居高雄 是與濟僧正 傳文也 弘仁時無太上皇重可考或傳天 長九年有此事可尋 承久第二之曆大 〇 上句之候以遍智院御本書了 賜紫沙門深賢 與書卷下 寫本云承元四年十一月一日 於醍醐寺遍智院書寫了 此傳二卷上下 聖賢阿闍梨三密房集也 東寺沙門成 承久二年正月廿五日以伴御本於今地藏 院北房書寫了 東寺沙門權律師深賢 弘法大師高野遺誠文 壹冊 與書 仁治四年二月六日於醍醐寺書寫 之 續門葉和歌集 十卷四冊 慶長九歲 月 日全部十卷為傳末代全 書寫了 無名抄 壹冊 與書 文明四年壬辰之春以東野州常綠 之正本寫之 自然齊宗祇更傳余 此正 本又有異本數多或名無題抄或號無名抄 今以無名題抄可為實名者也 明應六年丁巳之秋牡丹花寫之 伊勢物語 一條殿御筆 全 指微韻鑑 全 與書 嘉吉元年季仲春頃 權律師俊慶 文 集 第三 第四 二帖 與書 永正元甲子孟夏十日御領之 理趣經開題跋 金剛齋院常住 二本 與書 保元二年三月十五日丑時許於金 剛密寺書了 慶長十六歲次辛亥九月 十三日求之春良之 付法傳 卷二 壹冊

西大寺緣起 全 元興寺緣起 全 以上建永二年七月十日寫 性 靈 集 拾冊 與書第一 此書者故隆澄僧正持本也而 先年比有種々契約所讓與也 又同注廣本文句廣博之間拔要取證愚身 相伴抄出畢十卷同被讓之芳情尤深懇志 難忘相副本書所令案座右也 沙門法助記之 與書第六 御本云承安五年二月十三日 時奉授禪定大王畢李部少卿敦經同談義 理又齊請開梨侍座時也雨已止雲未晴矣 御史中丞兼翰林學士敦周 與書第十 貞應第二歲仲秋下旬候引合 勘注讀覺蓮房阿闍梨訖或訪西郊學窓或

嘉祿二年六月七日於遍智院奉傳授了同 開乘九人也建久二年五月六日金剛佛子 賢高野山蓮臺院書寫之 叫字秘釋 壹冊 永仁三年四月十四日以覺濟僧正本書寫 校點畢 聖經目錄 壹冊 正治二年閏二月之頃以御本書寫之全十 九日校合金剛佛子良尋 三教指揮 壹冊 與書 慶長十三年 日修獲矣傳領 證 談抄 壹冊 與書 貞治二年九月下旬比終功拭老眼 書寫此本自高野隨身沙門結判 應安四 年正月十二日以遍智院親王御自筆之本 寫 文明十一年五月 日 弘譽起之 新撰遊覺往來 壹冊 平氏傳 與書長祿四年寫 壹冊 石山寺緣起 壹冊 與書 慶長七壬寅年九月二十三日石山 寺觀音堂供養舞樂萬茶羅供師畢畢職衆 卅二口大施主權大納言秀賴卿依嚴命無 為令執行矣委讓別記畢 法務准三宮 續門 葉集 通村卿筆 壹帖 添翰 往年通村公新寫之續門葉集全一 冊 被入 法皇親覽候祖師憲淳僧正 撰集之功不殘 御感被覺召候依之御外 題之事就被申仰望 當今被染 宸翰候 且又集之宮從法皇被仰付被下候尤宮之 外題者通茂卿筆皆以依 法皇親慮如此 候貴僧之大幸不及申述累代寺門之榮耀 無限珍寶別而可有藏取候恐々謹言 九月十二日 定 短

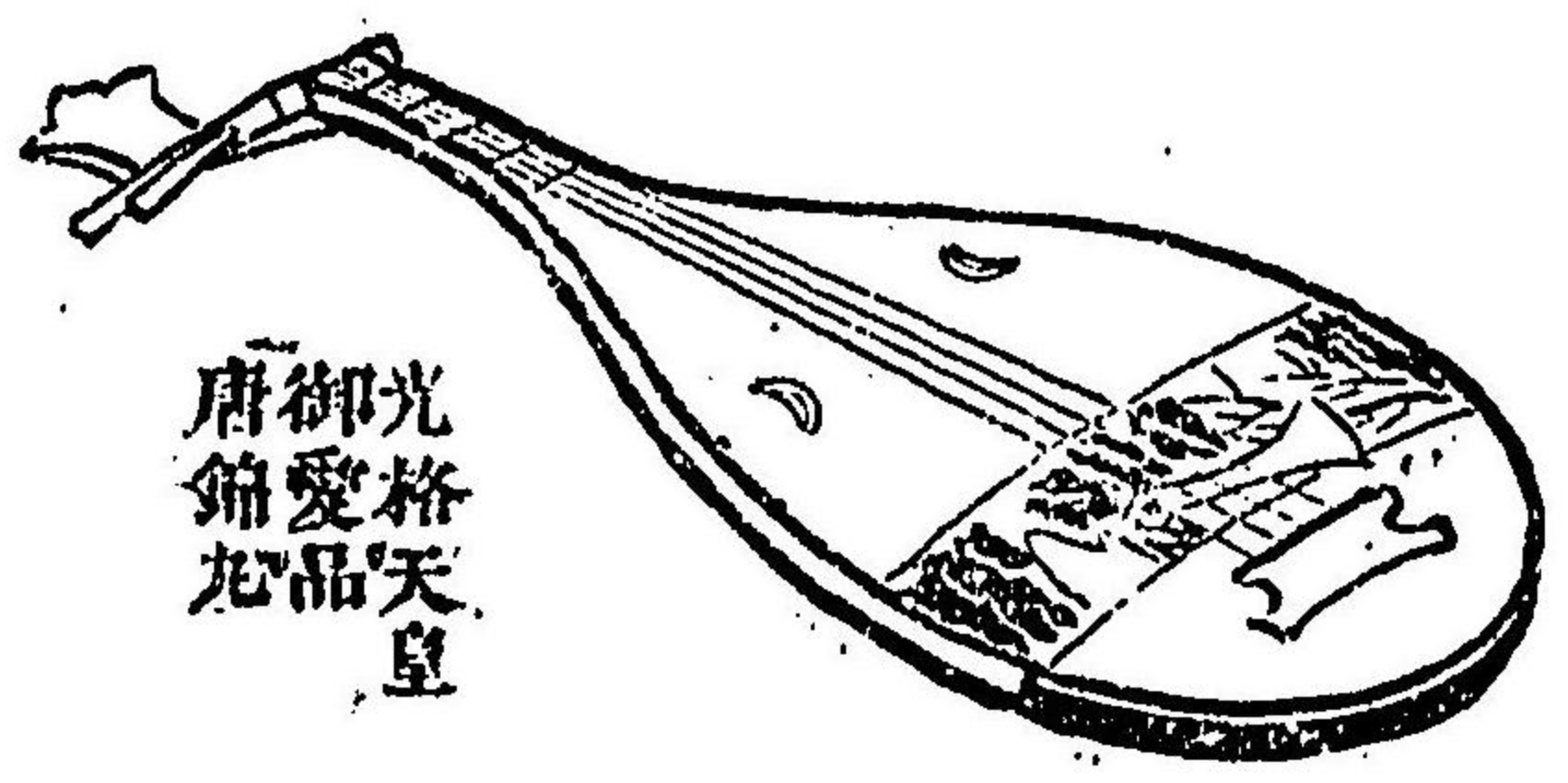
嘉祿二年六月七日於遍智院奉傳授了同 開乘九人也建久二年五月六日金剛佛子 賢高野山蓮臺院書寫之 叫字秘釋 壹冊 永仁三年四月十四日以覺濟僧正本書寫 校點畢 聖經目錄 壹冊 正治二年閏二月之頃以御本書寫之全十 九日校合金剛佛子良尋 三教指揮 壹冊 與書 慶長十三年 日修獲矣傳領 證 談抄 壹冊 與書 貞治二年九月下旬比終功拭老眼 書寫此本自高野隨身沙門結判 應安四 年正月十二日以遍智院親王御自筆之本 寫 文明十一年五月 日 弘譽起之 新撰遊覺往來 壹冊 平氏傳 與書長祿四年寫 壹冊 石山寺緣起 壹冊 與書 慶長七壬寅年九月二十三日石山 寺觀音堂供養舞樂萬茶羅供師畢畢職衆 卅二口大施主權大納言秀賴卿依嚴命無 為令執行矣委讓別記畢 法務准三宮 續門 葉集 通村卿筆 壹帖 添翰 往年通村公新寫之續門葉集全一 冊 被入 法皇親覽候祖師憲淳僧正 撰集之功不殘 御感被覺召候依之御外 題之事就被申仰望 當今被染 宸翰候 且又集之宮從法皇被仰付被下候尤宮之 外題者通茂卿筆皆以依 法皇親慮如此 候貴僧之大幸不及申述累代寺門之榮耀 無限珍寶別而可有藏取候恐々謹言 九月十二日 定 短

嘉祿二年六月七日於遍智院奉傳授了同 開乘九人也建久二年五月六日金剛佛子 賢高野山蓮臺院書寫之 叫字秘釋 壹冊 永仁三年四月十四日以覺濟僧正本書寫 校點畢 聖經目錄 壹冊 正治二年閏二月之頃以御本書寫之全十 九日校合金剛佛子良尋 三教指揮 壹冊 與書 慶長十三年 日修獲矣傳領 證 談抄 壹冊 與書 貞治二年九月下旬比終功拭老眼 書寫此本自高野隨身沙門結判 應安四 年正月十二日以遍智院親王御自筆之本 寫 文明十一年五月 日 弘譽起之 新撰遊覺往來 壹冊 平氏傳 與書長祿四年寫 壹冊 石山寺緣起 壹冊 與書 慶長七壬寅年九月二十三日石山 寺觀音堂供養舞樂萬茶羅供師畢畢職衆 卅二口大施主權大納言秀賴卿依嚴命無 為令執行矣委讓別記畢 法務准三宮 續門 葉集 通村卿筆 壹帖 添翰 往年通村公新寫之續門葉集全一 冊 被入 法皇親覽候祖師憲淳僧正 撰集之功不殘 御感被覺召候依之御外 題之事就被申仰望 當今被染 宸翰候 且又集之宮從法皇被仰付被下候尤宮之 外題者通茂卿筆皆以依 法皇親慮如此 候貴僧之大幸不及申述累代寺門之榮耀 無限珍寶別而可有藏取候恐々謹言 九月十二日 定 短

嘉祿二年六月七日於遍智院奉傳授了同 開乘九人也建久二年五月六日金剛佛子 賢高野山蓮臺院書寫之 叫字秘釋 壹冊 永仁三年四月十四日以覺濟僧正本書寫 校點畢 聖經目錄 壹冊 正治二年閏二月之頃以御本書寫之全十 九日校合金剛佛子良尋 三教指揮 壹冊 與書 慶長十三年 日修獲矣傳領 證 談抄 壹冊 與書 貞治二年九月下旬比終功拭老眼 書寫此本自高野隨身沙門結判 應安四 年正月十二日以遍智院親王御自筆之本 寫 文明十一年五月 日 弘譽起之 新撰遊覺往來 壹冊 平氏傳 與書長祿四年寫 壹冊 石山寺緣起 壹冊 與書 慶長七壬寅年九月二十三日石山 寺觀音堂供養舞樂萬茶羅供師畢畢職衆 卅二口大施主權大納言秀賴卿依嚴命無 為令執行矣委讓別記畢 法務准三宮 續門 葉集 通村卿筆 壹帖 添翰 往年通村公新寫之續門葉集全一 冊 被入 法皇親覽候祖師憲淳僧正 撰集之功不殘 御感被覺召候依之御外 題之事就被申仰望 當今被染 宸翰候 且又集之宮從法皇被仰付被下候尤宮之 外題者通茂卿筆皆以依 法皇親慮如此 候貴僧之大幸不及申述累代寺門之榮耀 無限珍寶別而可有藏取候恐々謹言 九月十二日 定 短

嘉祿二年六月七日於遍智院奉傳授了同 開乘九人也建久二年五月六日金剛佛子 賢高野山蓮臺院書寫之 叫字秘釋 壹冊 永仁三年四月十四日以覺濟僧正本書寫 校點畢 聖經目錄 壹冊 正治二年閏二月之頃以御本書寫之全十 九日校合金剛佛子良尋 三教指揮 壹冊 與書 慶長十三年 日修獲矣傳領 證 談抄 壹冊 與書 貞治二年九月下旬比終功拭老眼 書寫此本自高野隨身沙門結判 應安四 年正月十二日以遍智院親王御自筆之本 寫 文明十一年五月 日 弘譽起之 新撰遊覺往來 壹冊 平氏傳 與書長祿四年寫 壹冊 石山寺緣起 壹冊 與書 慶長七壬寅年九月二十三日石山 寺觀音堂供養舞樂萬茶羅供師畢畢職衆 卅二口大施主權大納言秀賴卿依嚴命無 為令執行矣委讓別記畢 法務准三宮 續門 葉集 通村卿筆 壹帖 添翰 往年通村公新寫之續門葉集全一 冊 被入 法皇親覽候祖師憲淳僧正 撰集之功不殘 御感被覺召候依之御外 題之事就被申仰望 當今被染 宸翰候 且又集之宮從法皇被仰付被下候尤宮之 外題者通茂卿筆皆以依 法皇親慮如此 候貴僧之大幸不及申述累代寺門之榮耀 無限珍寶別而可有藏取候恐々謹言 九月十二日 定 短

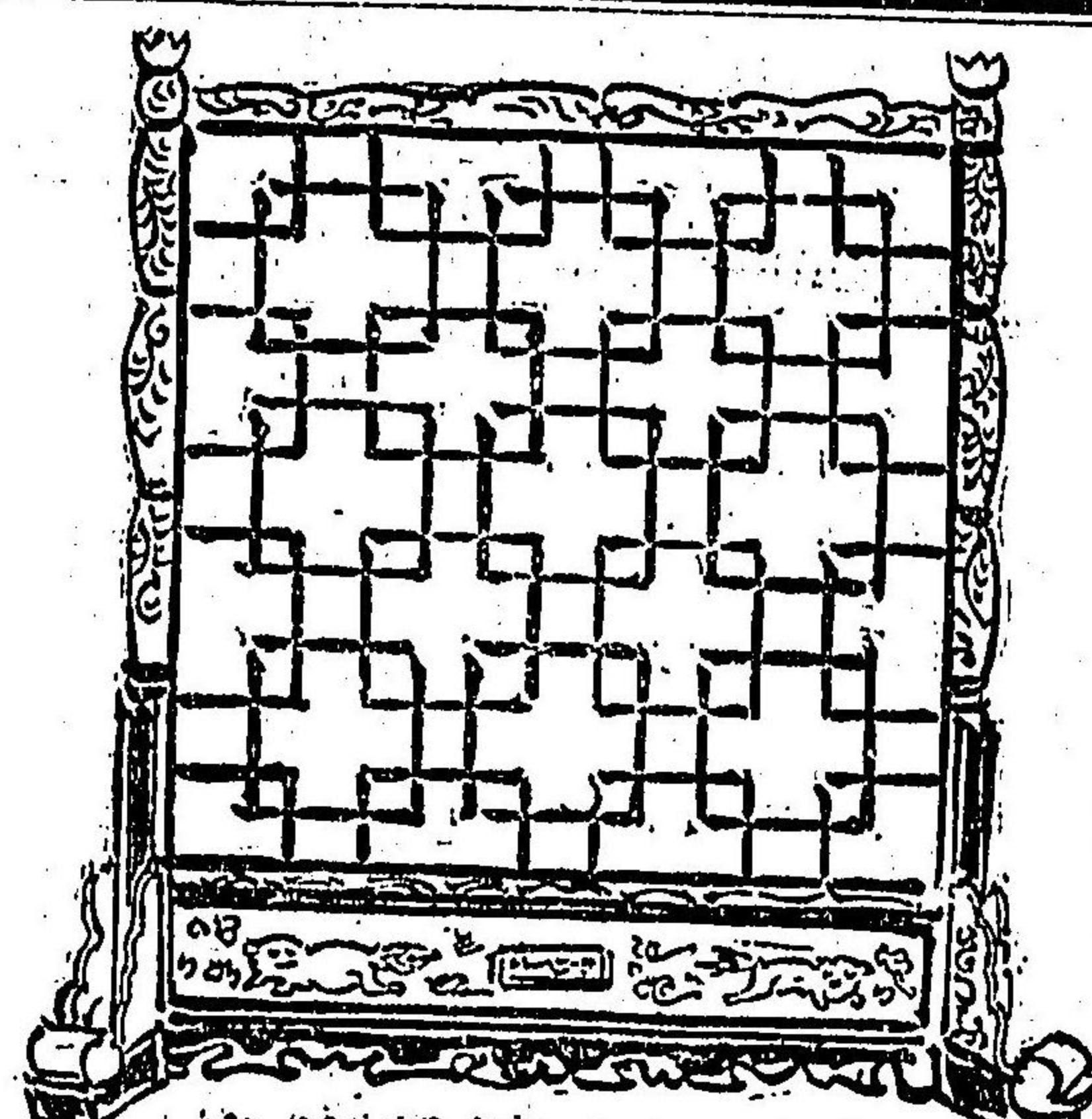
嘉祿二年六月七日於遍智院奉傳授了同 開乘九人也建久二年五月六日金剛佛子 賢高野山蓮臺院書寫之 叫字秘釋 壹冊 永仁三年四月十四日以覺濟僧正本書寫 校點畢 聖經目錄 壹冊 正治二年閏二月之頃以御本書寫之全十 九日校合金剛佛子良尋 三教指揮 壹冊 與書 慶長十三年 日修獲矣傳領 證 談抄 壹冊 與書 貞治二年九月下旬比終功拭老眼 書寫此本自高野隨身沙門結判 應安四 年正月十二日以遍智院親王御自筆之本 寫 文明十一年五月 日 弘譽起之 新撰遊覺往來 壹冊 平氏傳 與書長祿四年寫 壹冊 石山寺緣起 壹冊 與書 慶長七壬寅年九月二十三日石山 寺觀音堂供養舞樂萬茶羅供師畢畢職衆 卅二口大施主權大納言秀賴卿依嚴命無 為令執行矣委讓別記畢 法務准三宮 續門 葉集 通村卿筆 壹帖 添翰 往年通村公新寫之續門葉集全一 冊 被入 法皇親覽候祖師憲淳僧正 撰集之功不殘 御感被覺召候依之御外 題之事就被申仰望 當今被染 宸翰候 且又集之宮從法皇被仰付被下候尤宮之 外題者通茂卿筆皆以依 法皇親慮如此 候貴僧之大幸不及申述累代寺門之榮耀 無限珍寶別而可有藏取候恐々謹言 九月十二日 定 短



光格天皇 御愛品 唐錦丸

五八代記 義演准后筆 壹冊

山水圖 六曲斤集新古六組
千羽鳥圖 長谷川等伯筆 六曲
源氏五十四圖 扇形張交筆者不詳六曲
櫻花小禽圖 山口雪溪筆 六曲
紅葉小禽圖 同 六曲
十二月景物圖 畫定家歌歌 生駒等繪筆 六曲



文祿役分捕之衛立

牡丹秋之圖 景文筆 二曲
小松虫狩之圖 光字筆 六曲
尚齒會之圖 紀重就筆 六曲
菊之圖 在中筆 六曲
立圖 文祿役朝野分捕品 六曲
青松白蓮花車圖 法橋筆 大脚
正水筆 關之圖 小脚
書畫損交 來草筆 小脚
屏 大小二脚

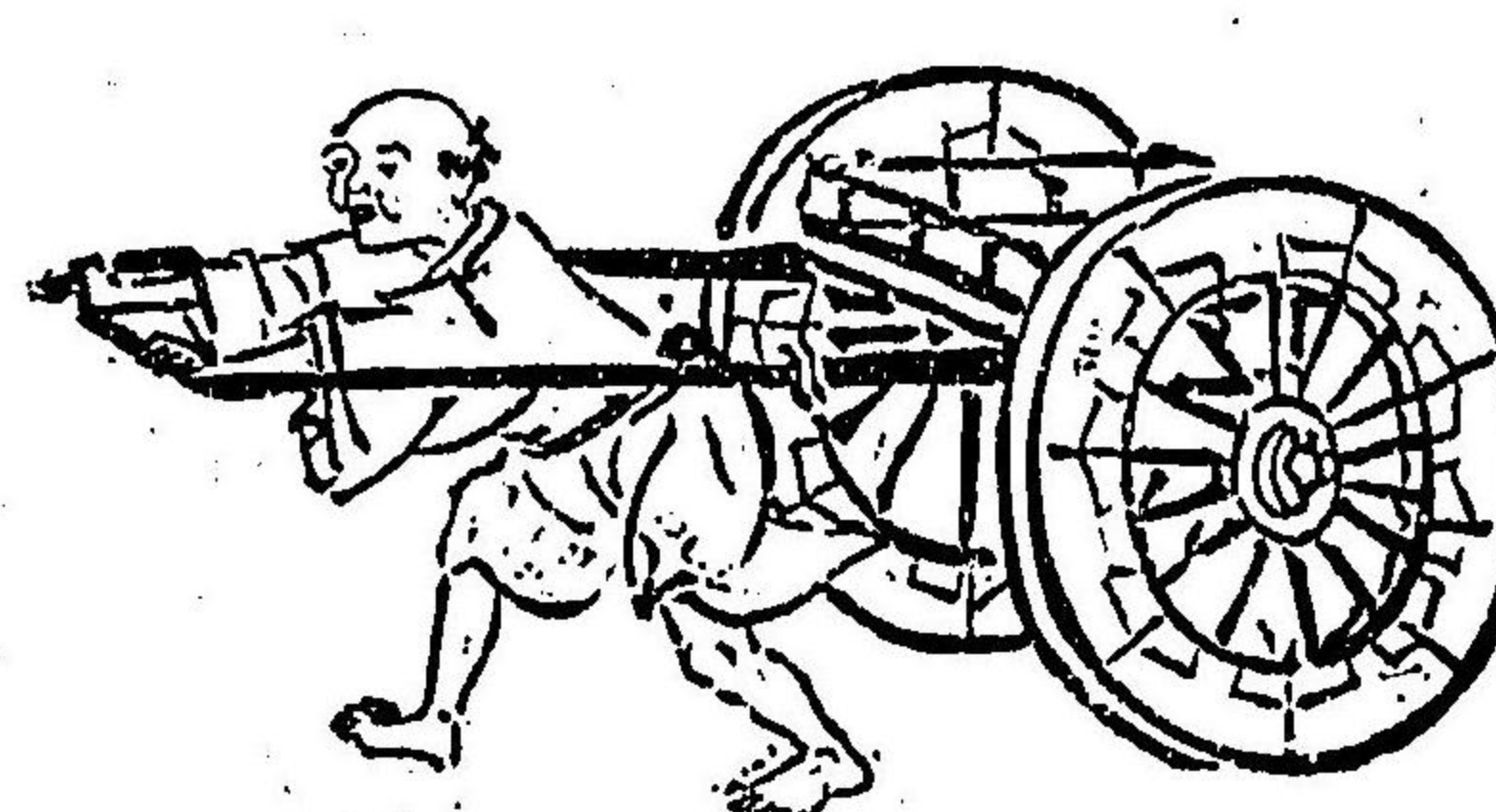
扁額

慈心院額 三枚
一道風筆
一同寫 寫者賀茂藤木甲斐
一同寫
裏書 夫當院額者昔曾小野道
風之墨跡舉世賞焉中間賀茂甲
斐寫之代之辻伯者彫焉予又効
擊手寫之刻之道風甲斐二扁俱
收拾秘庫內矣
享保十七壬子閏五月
現住俊應刻之
純淨觀之額 桐井法親王筆
古陶七賢人之額 支那製
髮毛製五字名號 弘法大師作
額 道風筆 二面各三寸五分
寶公之時

觀花幕之圖 豐公觀花屏 六曲
乘馬人物圖 生駒等繪筆 六曲
始皇狩之圖 岩佐又平筆 六曲
舞樂之圖 光格天皇御遺品 六曲
扇面張交圖 宗達筆 二曲

樂琴 唐桑漆 壹面
琴 唐桑漆 壹面
樂 唐桑漆 壹面
瑟 唐桑漆 壹面
橫 唐桑漆 壹面
簫 唐桑漆 壹面
樂 唐桑漆 壹面
楊 唐桑漆 壹面
琴 唐桑漆 壹面
太 唐桑漆 壹面
鼓 唐桑漆 壹面

白銀薄端之花瓶 菊御紋筆影
錫船形釣花瓶
白銀直切花瓶
唐銅大砂鉢
全小砂鉢



車人勝人益

阿蘭陀染付水指 同
全風呂 道八製
狸之燈籠 同
大藥火鉢
銀盃 大 六寸五分
中 五寸八分
小 五寸
徑 二寸二分
全鳴之香爐
鳴之香爐
宜德親子龜香爐
宜德大花瓶

宣德手爐 壹個
錫 壹個
唐銅桐御紋章付手水鉢 壹對
減金長柄之銚子 壹對

彫刻

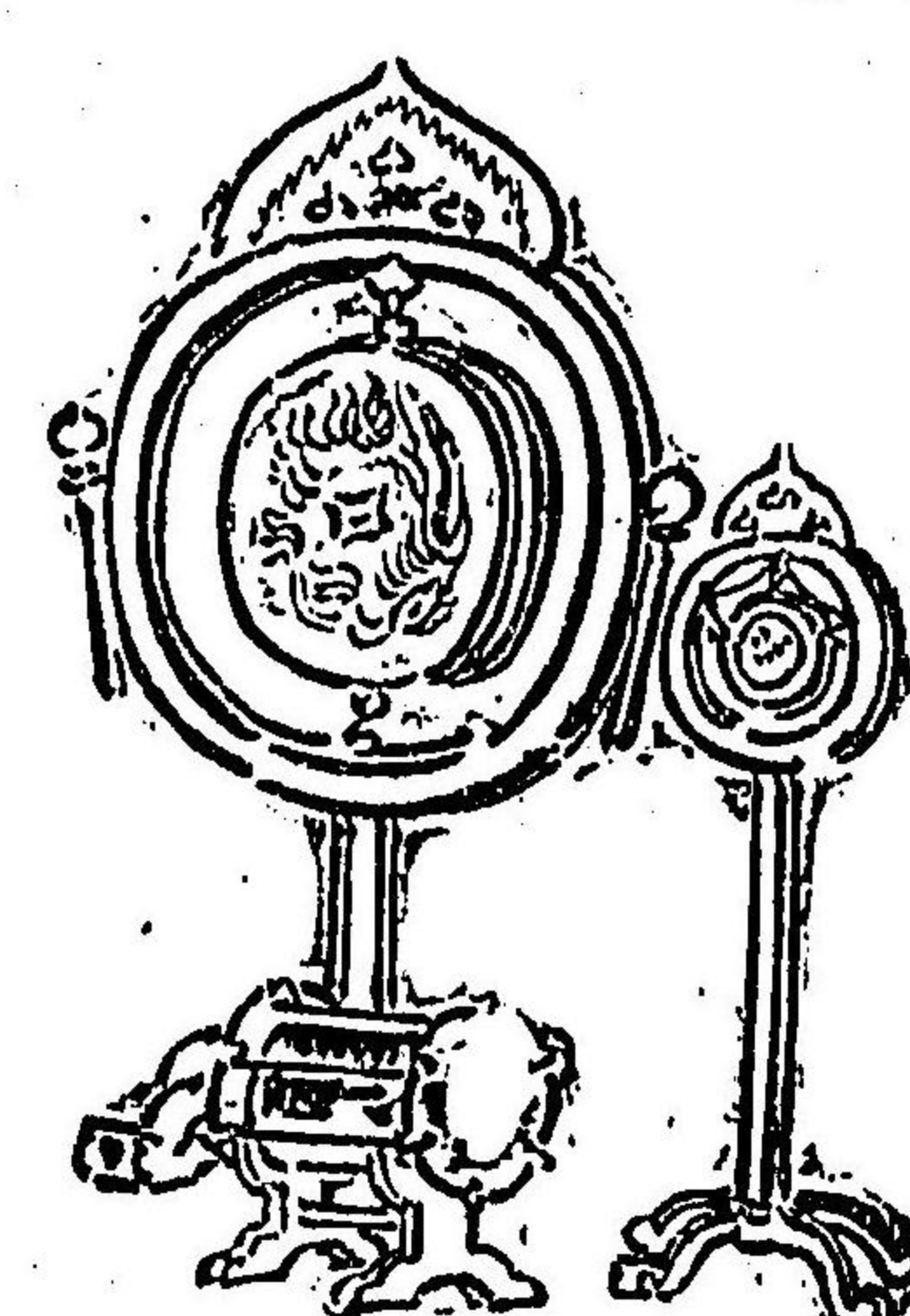
車曳人勝其盆 左甚五郎作 壹個
唐桑彫形提其盆 大小四對
高麗狗 大小拾對
時代六角重箱 壹組

刀劍

天國 長九寸
同 長二尺五寸
同 長二尺七寸
同 長二尺九寸
同 長九寸五分

音曲器

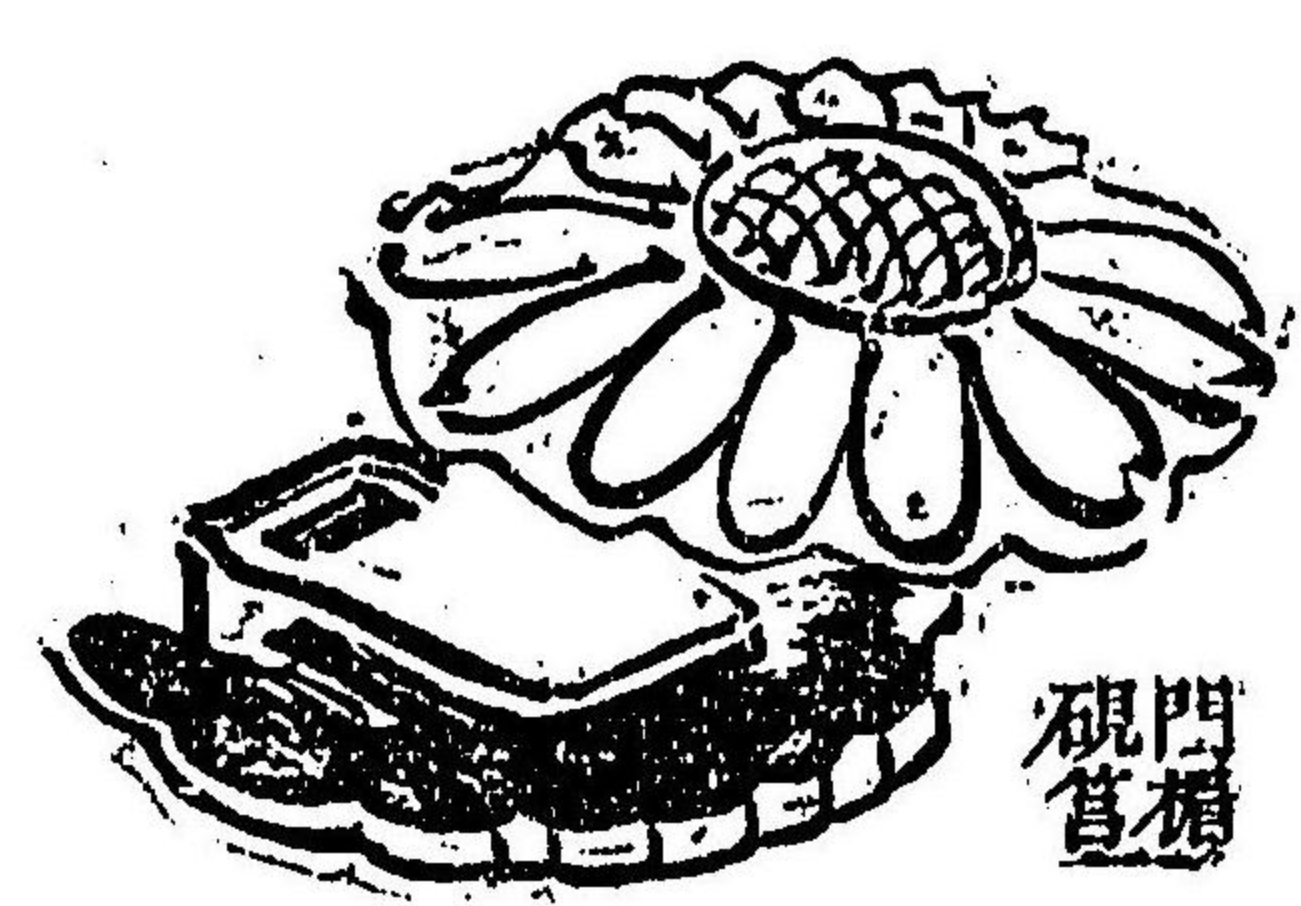
琵琶之記壹卷添 壹面
高演准三宮筆



料紙硯 金製于地斐御紋章入 一具
料紙硯 同 一具
硯字硯 同 一具
風扇 同 一具
唐桑磨出金模樣硯 同 一具
御手本 梨子地金銀模樣 一合

紙硯

御手本 梨子地金銀模樣 一合



門榻硯

藥單子 黑漆裝御紋付 一具
唐桑小單子 藤松葉松印 一具
角桑小機 四君子蒔繪 二脚

衣裳

三寶院流傳衣 夏冬 二領
修理院流傳衣 同 二領
無量壽院流傳衣 同 壹領
金剛王院流傳衣 同 壹領
地藏院流傳衣 同 壹領
後宇多法皇御製綾衣 成賢僧正御所用 壹領
與正菩薩御所用 壹領

剪綵繪

小屏風 花之畫 二曲片雙
茗器 紅葉之寶

古天明之釜 光格天皇御遺品 銘延壽庵
黑木釜 有馬之繪 銘大樂堂
平釜 同
圓釜 同
巴釜 同
古釜 同
切掛 同

水指 素燒 鉢水盂 信樂燒 鉢大藥盆 塗桶

同天目 一對 二個

同金天目 一個

古瀬戸天目 一個

黃伊良保茶碗

井戸脇茶碗

萬曆之茶碗

黒樂之茶碗

櫻富士之繪茶碗

赤樂天目

瀬戸耳付茶入

全振出茶入

眞漆桃山桐模樣

全牡丹模樣

茶杓 利休作 富書付江華 桐井燒

蓋銅建水置

唐文茶筥

結文茶筥

眞子子

高麗子子

及子子

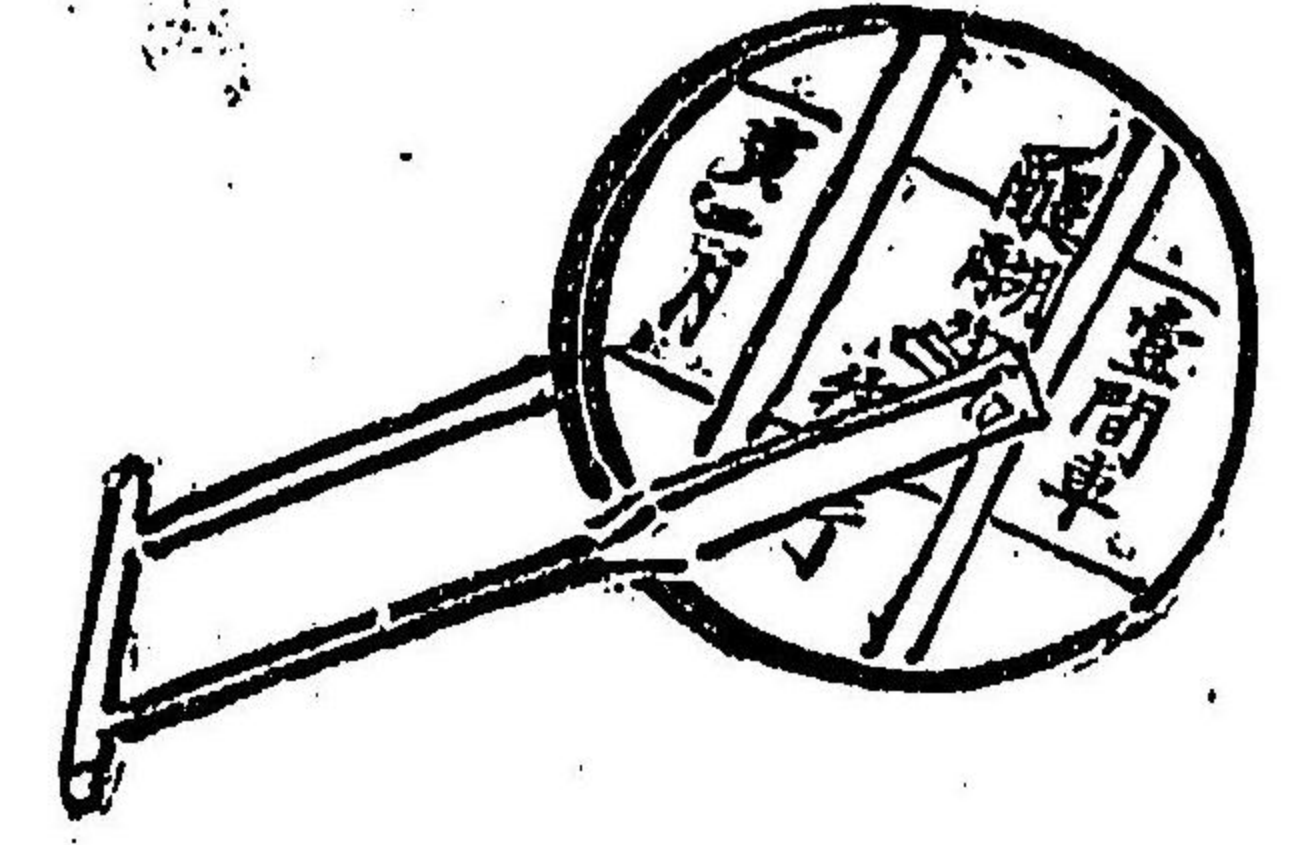
長及子子

四同輿 足利時代 豐臣時代 德川時代 足利時代 新期平門院繪物遺品

板腰輿

○襪品

天狗之爪 蛇骨 盆石 壹問車 古代測器



正誤

一丁表 下段 五行目 准服 誤 正

全裏 上段 廿三行目 不空羅 准服

全 中段 十三行目 太染 愛染

三丁表 上段 八行目 准服 准服

全 全 廿八行目 准服 准服

全 下段 十六行目 同ヲ脱ス 准服

全 全 二十行目 大元 太元

全 全 廿六行目 八臂大 八臂太

全裏 全 廿三行目 勝俱服 勝俱服

全 全 廿五行目 眞觀寺 眞觀寺

四丁表 中段 四行目 連華院 連華院

全 全 廿四行目 堯ヲ脱ス

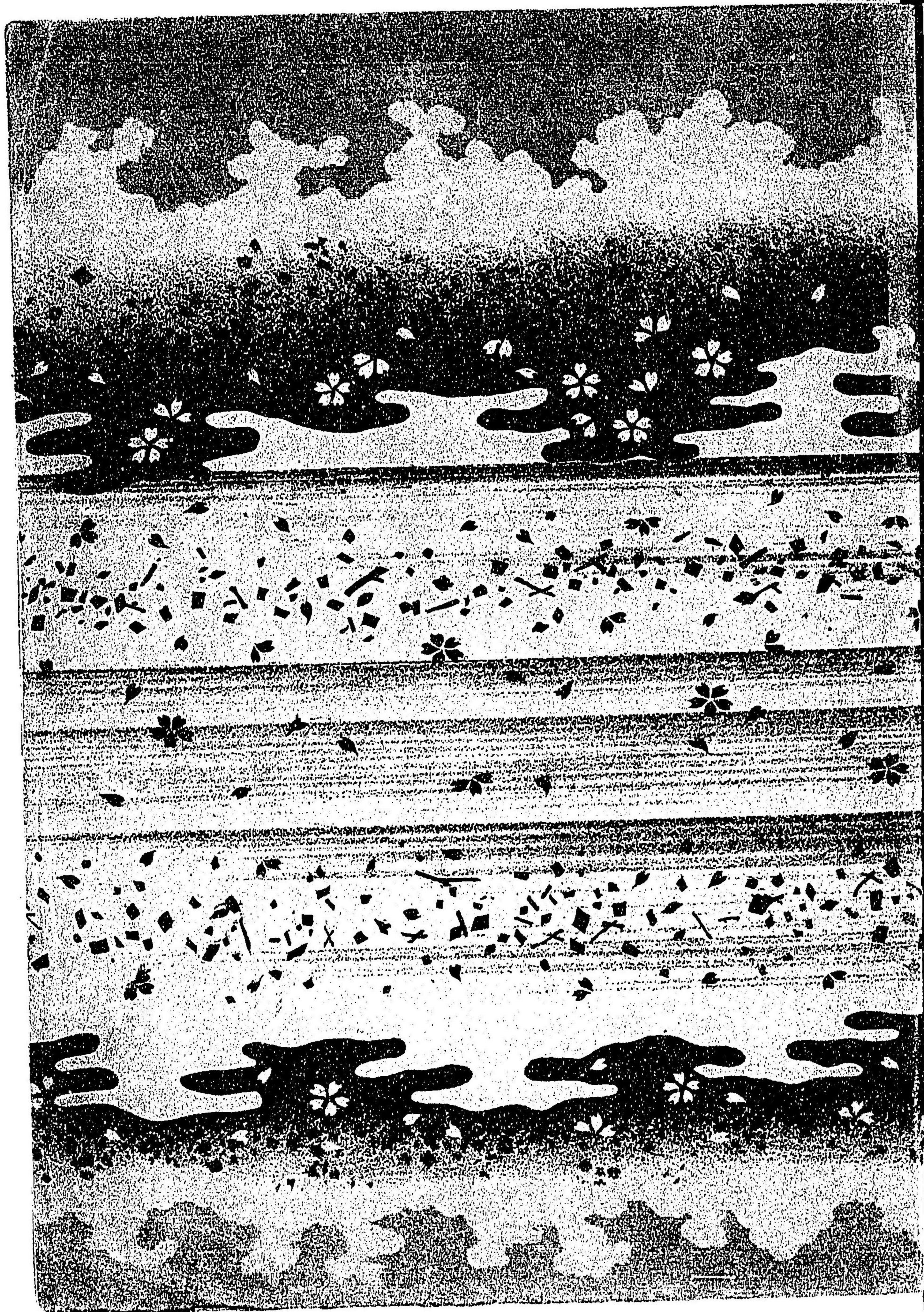
明治廿九年五月十四日印刷
全 年五月十七日發行

編輯兼 德島縣平民 玉園 快應

發行所 東京市神田區三崎町 三丁目第一番地 寄留 醍醐寺保存會本部

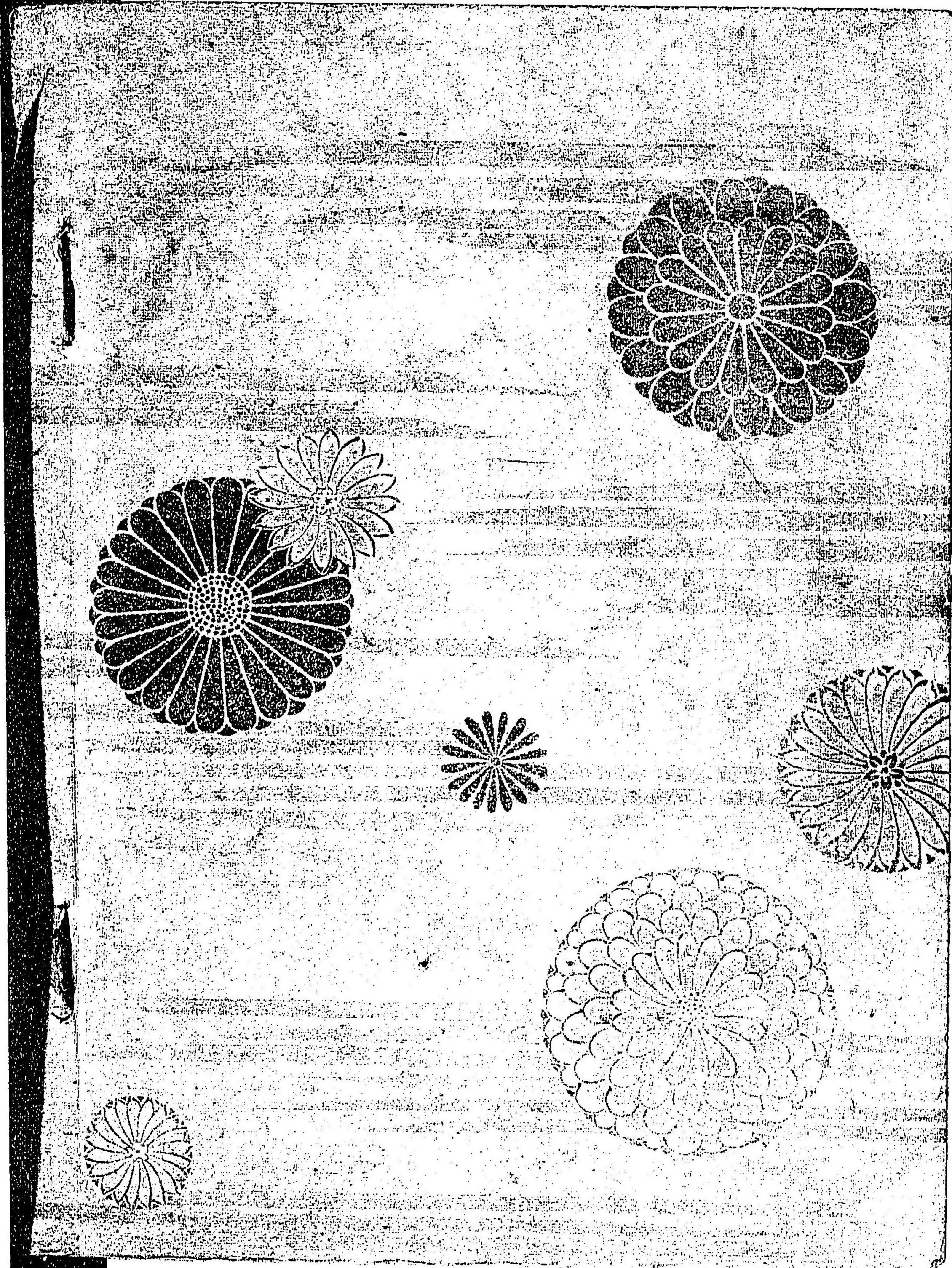
印刷者 吾妻 健三 郎 東京駿河臺柴町東陽堂本店

印刷所 東陽堂支店 東京神田區通新石町

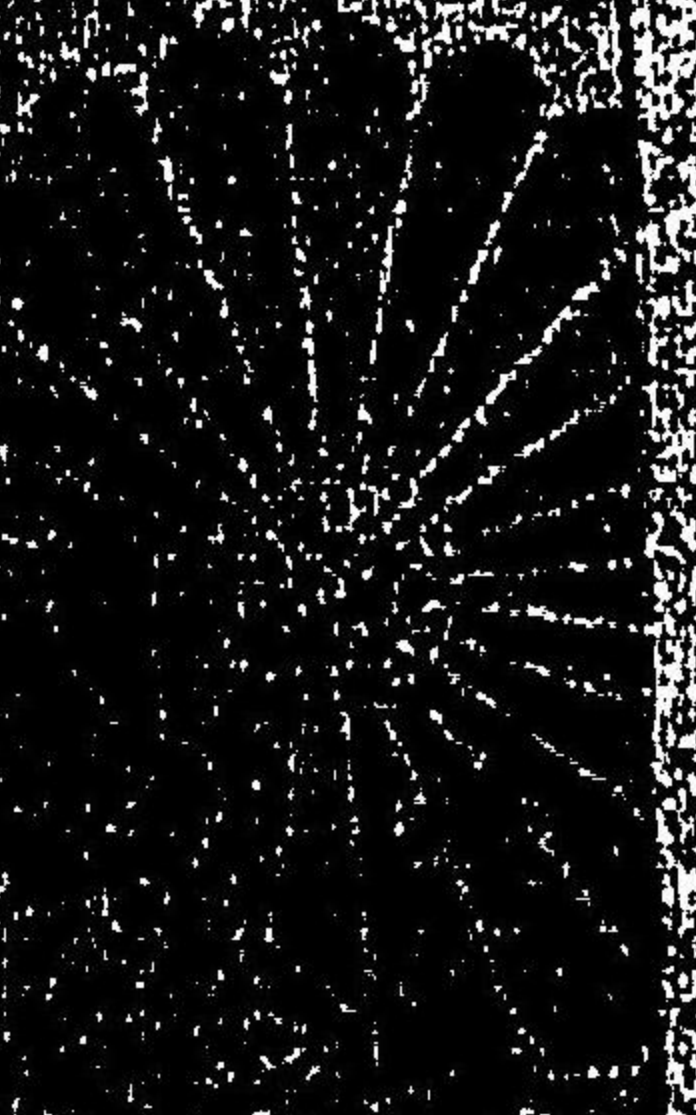
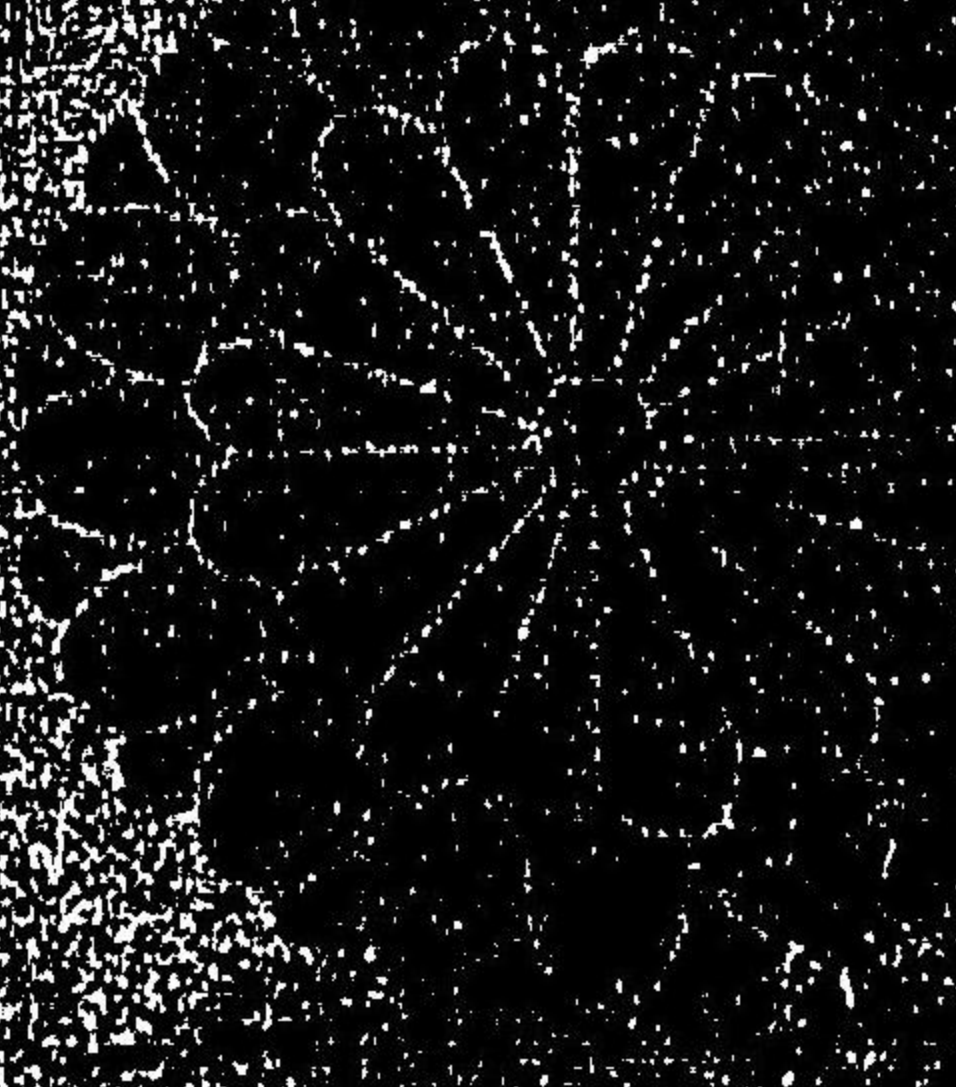


全
部
武
士
具
十
三
日
月
記

關
東
武
士
具
十
三
日
月
記
卷
之
一
上
部
關
東
武
士
具
十
三
日
月
記
卷
之
一
下
部
關
東
武
士
具
十
三
日
月
記
卷
之
二
上
部
關
東
武
士
具
十
三
日
月
記
卷
之
二
下
部



醍醐寺什宝品目



017120-000-9

188.55-Ka187d

醍醐寺什宝品目 第1輯

玉園 快心/編

M29.5

ABE-0420



188.55
Ka187d
W